
ナイト・スクウェア<evo . Balmy>

inea

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナイト・スクウェア>evo・Balmly<

【Nコード】

N4630B

【作者名】

inea

【あらすじ】

核暴走のため都心に壊滅的な被害が出た日本。治安は乱れ、殺人・窃盗など悪質な犯罪が横行していた。その状況をみかね、政府は犯罪者を犯罪者で封じるという打開策“レボリユーター計画”を打ち出した。そんな未来に生きる元重科犯罪者の少年沢森堯良と愉快な仲間たちと以下省略が、世にはびこる犯罪者たちを退治（逮捕）する、結構ギリギリ気味のギャグネタ満載アクション少量（？）、恋愛観は……のぶっちぎりハイテンションで描くコメディ。今回は温泉旅館にて一騒動。過激でシニカルでシニカルな奴等が大暴れ？

暗い、暗い部屋の中。部屋というより、倉庫に近い。ダンボールや何でかが山のようにつんであり、外からの光というものは一切ない。

箱と箱のちよつとした隙間に、ろうそくが一本、立っていた。煌々とした光が、左右にゆれる。それを囲んで、男が三人座っていた。

「兄じゃ」

低い唸り声のような声が響いた。ろうそくの火は激しくゆれ、話し手の顔を照らす。

「兄じゃ」

響く声は厳かだ。呼びかける男の眼光はまるで獣。図体も大きく、髪も狂気のように赤い。ばさばさしていて艶がないのが、余計に野生さを際立たせている。

「どうしたんですか、赤牙^{しゃくが}」

別の男が答える。少し甲高く、冷たい声。さっきの男とは真逆で、小柄で華奢だ。蛇のような顔と白い肌がいつそう不気味なものを持っている。

そんな男に赤牙^{しゃくが}と呼ばれた人間が問いかけた。

「今回も上手くいくか？ 何だか悪い予感が……」

少しばかり不安そうな声だ。その声に反応し、三人の男の中でも筋肉質、というより太っているという言葉が似合う男が口を開ける。

「あああ、当たり前じゃないですか、赤牙^{しゃくが}さん！ ですよ、銀牙^{ぎんが}さん？！」

慌てた話し方がこっけいだが、本人は真剣であるのだらう。身を乗り出して、さっきの華奢な男に問いかける。その銀牙^{ぎんが}という男は

冷やかに笑って、目を閉じる。

「ええ、当たり前ですよ。依頼は絶対なのですから」

冷たく、残酷な声が倉庫の中に響き、ろっそくの炎は小さくなった。

「明日、温泉に行くぞ」

スーツで仁王立ちをしているイヴンの言葉に、急にみんなのモーションが固まった。

今日は日曜日、明日は学校だ。俺は壺花ちゃんにあえるという喜びに浸りながら、ベッドの上をごろごろしていた。

「によ、明日は学校だよ。俺の天使の壺花ちゃんに癒される日々が、また始まるんだよにやあ」

「何かウナギ並みに気持ち悪い動きと言葉だな、」

龍志の間髪いれずのコメントに俺は思わず飛び上がった。

「あのなあ、俺とウナギと一緒にすんなよ。てか、何でウナギなんだよ！ あれうまいじゃんかよっ」

「そうだな。うん、そうだよな。だつて、お前……」

龍志はそう言って、俺の方を上目遣いで見てくる。そして、

「汗臭くて不味そう」

と、言いながら雑誌に目を戻した。

「汗臭いつて何だよ、毎日体も心も洗ってるわ！ 植・物語でちゃんと洗ってるっつーの！」

俺の猛反発に龍志は「うそだな」と軽く言う。

「何が『うそ』なんですかね。俺の言葉になんぞ間違いでもありませんしたかねえ」

ひねくれて質問する俺。

「心洗ってるわりには、ぎゃーぎゃーうるさい」

「な……っ！ ていうか、何でお前が俺の部屋にいの？！ しかもなんつー雑誌読んでんだよ！」

龍志の持つている雑誌を指差しながら叫ぶ俺。さっきから立ったり座ったり忙しいな、と自分でも思いながら、それでもその本が気になっていた。

「なんつー雑誌って……『熟女クラブ』。紅王からもらった」

俺は絶句した。何だお前は！ 人の部屋きてそんなん読んでんのか！？ てか、とうとうお前、紅王からその道の招待状（でも、それって高年齢の人が読む奴じゃない？）が来たか……。何だか俺よりも龍志の方が可愛そうに思えてきたし。

あ、俺は沢森堯良。もうすぐ受験シーズンに入る中学三年生で、心やさしいピュアな少年さ。

「嘘をつくな。お前のどこが“ピュア”だ。どす黒くて前も見えやしない」

「ああ！？ 俺の心は水晶玉みたいに綺麗でピカピカしてるわ！ つて何でお前、俺の心の中を……」

龍志の言動にたじろぐピュア少年。発言当人は鼻で笑っている。嫌みつたらしくて俺の純白さを汚すこのバカは、小野崎龍志。ちなみに俺と同じ十五歳だけど、口調とか行動とかが五十代前後の堅

苦しい親父に似ている。

まあ、それかもしれない事だったりする。俺たちは普通とは違う生活を送っているんだ。それくらい個性があつたって、別に不思議なことじゃない。

俺達は、レボリユーターといわれる元重過犯罪者で、今は警察の一番ヤバイ現場職、つまり同じ重過犯罪者たちを捕まえるってことをしている。でも危険だ。それだけじゃフェアじゃないといい、俺たちには一つの自由が与えられた。そう、一つだけの自由を。

それと引き換えに危険な夜の逮捕劇を繰り返してらるってわけ。ちなみに俺の務め先は派出所っていう交番的なもの。ついでに俺の方が龍志より先輩。てか、俺の単独初手柄が、龍志だったりする。

「それより」

急に龍志の方から話題を変えてきた。普段からあまり自分から話そうとしないあいつが、話し掛けてくるなんて。珍しい。

「何？」

テノール調になりかけている声で俺は会話を続ける。

「今日の局長の様子、おかしかったな」

こう言われ、俺は朝の出来事を思い出そうと、必死に天井を見上げていた。

「確かにな。いつもよりそわそわしてたし。あれじゃね？ 新しい

アニメのフィギュアでも売り出したんじゃないの？」

「そうだな、オタクだからな」

「ああ、ヲタクだもんな」

たった四回で会話終了。向こうも別に話を続けたいわけでもなさそうなので、ふたり別々に思い思いの事をし出す。龍志はそのまま熟女クラブに専念し（止めようかと思っただけ）、好きで読んでるなら、別にいいかと思っただけ）、俺はベッドの上で、昨日読みかけた本

を開く。

そのとき、下から叫び声が聞こえた。

「あゝきらあ、りゅゝじい！　ちよつと下にきてえ」

ルイナの大声だった。俺と龍志はたがいに顔を見合わせて、手に読んでいたものを持ったまま、声の出所まで降りていった。

「何かあった？」

ダイニングテーブルに同居人たちが勢ぞろいしていて、その様子を見ながら俺がそう聞くと、手前にいたルイナが答えてくれた。

「何か、特別調査について、今から説明するってさ」

ルイナの限りなく海に近い澄んだ丸い目が、こつちをじつと見る。「ふうん」と呟きながら、俺達は空いている席に座った。彼女は、ルイナ・ウェリック。派出所の中で二番目に偉く、一番背が低い二十三歳。ちなみに、怒らせると二番目に怖い。

俺は隣に座っている、怒らせると一番怖い魔王様に話し掛ける。

「特別調査って？　玖月さん、何か知ってる？」

魔王玖月様は少し微笑みながら、

「僕も知らされてないよ、今回は。まあ、大丈夫だよ。変なのだったら、墓石の下に埋めてやるから」

爽やかに笑顔を作りながら、なかなか怖い事をいつてる玖月さんに、俺は苦笑いで返すしかなかった。

この爽やか魔王様は薊　玖月>アザミ　クヅキ<。綺麗、怖い、かつこいいの三Kそろった人で、ルイナとは同い年らしい。詳しいことはあまり知らない。俺がはつきりと知ってるのは、本名と昔、毒殺魔で漆黒の皇帝“Mr・Raven>ミスターレイブン<”と呼ばれていた事だけ。

そんな謎だらけの魔王様がゆつくりと自分の正面の男を見据える。嘘のように真っ赤な紅の髪が目に見える。結構ちかちかするその色を見ながら、玖月さんが、

「切りたい」

と呟いたのが聞こえた（「斬りたい。」じゃないよね！？「あのぼさぼさの髪の毛、切ってやりたい」の「切りたい」だよね？と一瞬冷や汗をかいたけど）。

「龍志……あんた何て物、読んでの？！」

突然、ルイナの声があがった。見てみると完全に引いてるルイナの姿があり、龍志は普通に、

「さつきも堯良に言っただけど、『熟女クラブ』。紅王からもらった」

と、言う。玖月さんはそれを見て、瞳孔を開いていた。正直言って、今は龍志がそんなのを読んでいることより、玖月さんが怖い目をしているのが、恐ろしい。

龍志の言葉を聞いたルイナは、魔王様の前の赤髪を思いっきり引っ張る。

「い、いだだだだっだ！ な、何しやがんだ、ゴリラ女？！」

引っ張られ、涙目になりながらも毒言を吐く紅王。最後の“ゴリラ女”に怒り、もつと髪を引っ張りだしたゴリ……もとい、ルイナを、誰も止めない。

「あんたあああ！ ゴリラって何だ、ゴリラって！ だいたい、龍志に何読ませてんの？！」

「何って……あ。それ、俺がやった本じゃん」

驚いたように紅王は指を指す。そして、急にハツとし、玖月さんの方をちらりと見た。相変わらず素敵な笑顔を浮かべている玖月さん。紅王も苦笑いをしながら、視線をそらす。

「何でこんなもん、まだ十五の少年に！」

「まあ、成り行き上で」

どんな成り行きですか——！？ 変な風になだめる紅王を見て、俺は心の中でツツコんだ。

赤髪のこの変態は、井 紅王>ジン ホンレンく。逮捕理由は覗きとか痴漢とかそういうのじゃなく、言うより、そっちの方がまだマシだ。俺は詳しく知らないけど、まれにみる殺戮記録を作り上げた狂気の犯罪者、らしい。まあ、今はただの変態になってますけど。

そんなゴタゴタがミニゴリラ女バーサス変態エロ人間の戦いになりかけたとき、リビングの扉がひらく。なぜかつけられている熊避けの鈴が勢いよく響いて、その場が静かになった。

「諸君！ 朗報だッ！」

着こなされたスーツを乱しながら、男が歓喜の声をあげて入ってくる。どうせお前の好きなタグイの新しいフィギュアでも発売したんだろ、という白い目が一斉に向いたのか、慌てる局長。

「なななな、何だお前らその目は……さげすんでいるのが目に見えてわかるぞ」

「さげすんでるんじゃないくて、本格的に別種として見てる」

龍志の静かな意見に、皆が心の中で納得した（と、思う。てか俺はそう思う）。ハッキリと断言された別種は拳を作りながら、「貴様らに優しさという言葉はないのかア……」とぼやいていた。

「君の事はどうでもいいけど、何なの、イヴン。朗報って？」

玖月さんの笑顔の毒言がきました。前の方の言葉が本当にどうでもよさそうに聞こえた。

「く、玖月！ お前までそんな事……」
「さっき僕が言ってたの聞いてた？」

涙目の局長に玖月さんが更に痛い言葉のカウンターを放つ。笑顔での圧力が怖い。

そんなやり取りの中、急に龍志が「のど渴いた」と言った。その言葉に反応し、玖月さんが優しく「そうだね。じゃあ、お茶でも入れようか」と、席を立つ。完ぺきに話を聞かれてませんな、おい。派出所のトップという威厳が、この前きたばかりの龍志にも通用していないところを見ると……――

「そうだな。 “ 局長という階級は、もう既にあだ名 ” としか、思えない」

「だから何で俺の心の言葉を読むんだよ？！」

「だって、見えるから」

「見えても読むな！ 読みきるなあああ！」

冷や汗をかいて叫ぶ俺に、龍志が舌うちをする。くそう……。

「……誰も、誰も聞いてくれない。俺は……俺は何て恵まれていないんだ……。ふ、そうだよな。誰も彼もこの世は敵だらけ……」
「皆あ！ いじるのやめてもうそろそろ話、聞いてあげましようねえ」

卑屈モードに入りかけている局長に、ルイナの声がとぶ。玖月さん意外は全員、黙って席で大人しくなった。

「ほら、局長！ 皆、話聞きたいって。めそめそせずに早く話そう

ね」

につこり顔のおねえさん。優しいのかどうか分からない言葉、しやべってますよ！

「ほ、本当か？！ う、うう……そうか。やはりお前達に囲まれて俺は、俺はっ！」

ってさっきのでもいいのか！？ あんた、バカだろと思いつつ、涙を拭う局長を俺は思いっきりいやな目でみた。

「なら、よく聞けよ。明日……明日……」

皆が息を飲む。局長は十分間を取った後（出ました、お決まりのクイズミリ・ネア）、いきなり天井を勢いよく指差した。

「——……明日、温泉に行くぞ！」

スーツで仁王立ちをしているイヴンの言葉に、皆が動きを止めた。手や目、足のその他もろもろの動きを。

唖然と局長を見上げている俺達（と天井を先に見てから、はつとする龍志）。そんなアホな顔を見ながら、自慢げに「ふふん」と鼻をならし、完ぺきに勝ち誇った顔をしているヲタク約一名。そのヲタクの頭に、

「そのインスタント的に出費がかさむような“くだらない”事ばかり考えだすの、やめようね？」

という、怖い笑みを含んだ言葉とともに突然液体が降り注ぐ。無事、局長の頭に辿りついた液体は、湯気とほどよい香りをそこに残しながら髪の毛を……。

「あああああああああああ——っ!!」

数秒後、完ぺきな泣き顔で局長は床にのた打ち回っていた。それでも笑顔の玖月さんは液体を垂らすのを止めない。湯気がもわもわとたつて、熱さがこっちにまで伝わってくる。

「君、今の僕等の財政状況わかってるんでしょ？」

笑顔満点の玖月さんが垂らすほうじ茶を必死に避けながら、局長は裏返った声をだして喚く。

「あああああ、分かってる！ 分かっているからやめてく」

「分かっているのに金がかかることすんの？ へえ、ていうことは、管理している僕に喧嘩うつてるんだね」

「く、玖月、お前は完全なる誤解をしている！ 特別捜査なんだ、信じて……ギヤアアアアアア！ 龍志、何だその小瓶は？！ 何もってきたんだ？！」

局長の視線の先を振り返って見ると、いつのまにか龍志が学校で飲む牛乳サイズのガラス瓶を片手に立っている。その中には何か液体っぽいのが入っていて、ヤバ気な雰囲気を出していた。そして、その小瓶を持って玖月さんに近づき、差し出す。受け取った玖月さんは満足そうに、「ありがとう、龍志。塩酸を持ってくるなんて、君は優しい子だね」と言った。

その言葉を聞いた被験者の目の色が変わる。

「塩酸！？ お前は俺を殺す気か?!」

「いや、ヲタクを治してあげようと」

無表情にいう龍志の頭に玖月さんの綺麗な白い手がのる。

「本当にいい子なんだね龍志。でもね、彼のオタク心はこんな
じゃ治せないんだよ」

玖月さんはそう言いつつも、硫酸入りガラス瓶の蓋を開けながら、
「まあ、一時的な治療だけど」と呟いた。って、それでも治療にな
るんですか？！

「一時的でも何でもないわ！ 爛れる！ 溶ける！ 死ぬッ！ あ、
堯良、助けてくれ！」

必死の抵抗をみせる局長を見ていた俺は思わず鼻でニヒルに笑う。

「明日、学校なんだよね。俺の夢の日々が、また始まるんだよね」
「な、何か、罪悪感が……ルイナ！ 笑いをこらえていないで助け
てくれ！」

ルイナは真っ赤な顔をして笑いをこらえていた。「だって、だつ
て……」という震える声が聞きえる。つかえないと思ったのか、局
長は紅壬にまで助けを求めている。

「紅壬！ 助けてくれ！」

「めんどくせえよ」

本当にやる気なさそうな声で答え、うつ伏せる紅壬。やっぱり局
長と言う階級はもうあだ名だった。

「お願いだ！ お前しかいないんだ！」

焦る男にどんどん危機が迫ってくる。既に瓶は傾けられて、もう
すぐ中のものが出てきそうになってる。玖月さんの顔は、正直言っ
て怖くて見れません。てか、さつきから怖い笑顔が素敵に輝いてま
すよ？

「は？ 野郎に何か興味ねえって。俺は可愛い姉ちゃんたちに頼
られてえよ……」

「ひ、ひい！ 玖月、やめ……おい紅壬、仕事とはいえ、温泉は混

浴だぞ?!」

叫びが響いた瞬間、ピクッと紅王の腕が動く。

「それも混浴の風呂の方が、いい湯だそうだ!」

紅王の輝いていく顔がゆっくり上がる。向かい側の俺は完全に引いていた。

「ぜ、絶対に宿泊した女性客たちは混浴に入っていくらしいぞ?!」

「まじか——?!」

紅王は嘘のような早さで局長の元いき、吊り上げて激しくゆすっている。「ほ、本当だ」と苦しそうに言う局長を急に落として、「よっしゃああああああっ!!」

と、近所迷惑最大の音量で、雄叫びを上げた。そして、急に玖月さんの方によって小瓶を奪い、なだめ始める。……混浴ってすごいんだね。

「まあ、アレもああ言ってるじゃねえかよ、許してやれよ?」

「嬉しいのは君だけだよ」

「んなことねえよ? 捜査もしなくちゃいけないんだろ? 俺は捜査なんて大っ嫌いですよ? な?」

紅王の言葉に縦に強く頷くアレ（落とされたときにうつた腰がそんなに痛かったのか、すごく顔が歪んでたけど）。

「それに仕事なら、旅費だって公費としてもらえんだろ?」

「そうだけどさあ……」

渋い顔をする玖月さんに「いいじゃねえか」となだめる紅王。鼻の下が完全に伸びてますよ、この変態工口人間が。

結局、特別捜査の件は、実権を握っている玖月さんがしぶしぶだけれど承諾したため、温泉旅館に行く事になった。はあ……壹花ちゃんに会えないなんて……。俺のテンションは下がりまくりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4630b/>

ナイト・スクウェア<evo . Balmy>

2010年10月9日18時41分発行